



# 青年国際交流 2019 International Youth Exchange

「世界を見に行ったら、自分を見つけた」



# 一歩踏み出せば、 人生はもっと豊かになる



内閣府青年国際交流事業は、国際社会・地域社会で活躍する次世代のリーダーを育成することを目的とし、国際的課題についてのディスカッション能力の向上や、国際社会での実践力の向上を図る、青年人材育成プログラムです。

## 内閣府が実施する6つの青年国際交流事業



「東南アジア青年の船」事業
「世界青年の船」事業
国際社会青年育成事業
日本・中国青年親善交流事業
日本・韓国青年親善交流事業
地域課題対応人材育成事業 「地域コアリーダープログラム」



## 事業に参加すると、こんなことが身に付きます！

### ■ 異文化理解能力

文化の「違い」と、逃げ場のない環境に悩み苦しんでいた時、笑顔で声を掛けてくれたのは相部屋の外国参加青年でした。  
⇒大江章太さん（2017年度「東南アジア青年の船」事業参加者）の感想はP.4へ



ホームステイを受け入れてくれた中国人家族とは、言葉の壁を越えてお互いに理解を深め合うことができました。  
⇒飯塚真央さん（2017年度日本・中国青年親善交流事業参加者）の感想はP.10へ



### ■ 日本の良さを対外的に発信する能力

船内の自主活動で武道会や百人一首勉強会を企画。自分から日本文化の発信ができたことは大きな自信になりました。  
⇒中塚千和さん（2017年度「世界青年の船」事業参加者）の感想はP.6へ



### ■ 国内外の青年とのネットワーク

最も大切な出会いは一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出会い。人との出会いは自らの行動を変える力があります。  
⇒宮澤俊太郎さん（2017年度国際青年育成交流事業参加者）の感想はP.8へ



ディスカッションや文化交流を通して築いた韓国青年との友情。派遣が終了した後も連絡を取り合っています。  
⇒木村朝香さん（2017年度日本・韓国青年親善交流事業参加者）の感想はP.12へ



### ■ 専門知識

派遣先で知った、「ユースワーカー」と呼ばれる若者の支援に携わる人々の存在。帰国後、自身も「ユースワーカー」の意識を持ち、動き始めています。  
⇒高島靖明さん（2018年度地域コアリーダープログラム参加者）の感想はP.14へ





船内で各国政府代表会議の模擬練習をする参加青年たち(「国際関係(日・ASEAN協力)」グループ)

# 「東南アジア青年の船」事業

## Ship for Southeast Asian and Japanese Youth Program (SSEAYP)

「東南アジア青年の船」事業は、1974年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ各国(当時のASEAN5か国)との首脳会談による共同声明に基づき、ASEANと日本による青年国際交流の共同事業として開始したものです。1995年からブルネイ、1996年からベトナム、1998年からラオス、ミャンマー、2000年からカンボジアが参加し、これらASEAN各国の協力のもとで、日本政府が実施しています。

ASEAN10か国の青年と船内で共同生活をしながら、ディスカッションや文化交流を行います。

東南アジア各国から選び抜かれた青年とのネットワークを構築するとともに、アジア地域の未来を担う人材の育成を図ります。

### [事業概要]

活動内容： ディスカッション活動、各国紹介、委員会活動、参加者による自主企画活動、表敬訪問、ホームステイ、課題別視察等

ディスカッションテーマ： ①グローバル化の功罪 ②情報とメディア ③国際関係(日・ASEAN協力) ④長寿社会を生きる ⑤質の高い教育 ⑥レジリエントで持続可能な都市づくり ⑦ソフト・パワーと青年の民間外交 ⑧手頃で信頼でき持続可能なエネルギーの利用 ※2018年度の例

参加国： ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムと日本

参加青年数： 日本参加青年40名程度、外国参加青年10か国280名程度

訪問国： ASEAN諸国4か国程度

運航期間： 11月～12月頃(40日間程度)



安田蒲鉾でかまぼこ作り体験(地方プログラム、福井県)



課題別視察先のKrousar Thmeyにて現地青年と点字で交流(「質の高い教育」グループ、カンボジア)

### ■参加青年の感想

私にとって「東南アジア青年の船」事業は、日本とASEANの**青年たちが船上でつくる2か月間の小さな社会**でした。その社会の中には、性別や年齢はもちろん、文化や宗教が異なる多種多様な人がいて、様々なプログラムを自分たち自身で運営していきました。そのために私たちは、議論をし、時にぶつかり合いながら一つのよりよい結果を生み出していきました。

その船上の社会の中で、私は日本では感じることをさしなかった多くの「違い」に直面し、違和感や戸惑いを覚えました。その「違い」とは、文化の違いであり、規則や時間、コミュニケーションに対する考え方が日本とは異なっていました。通常の社会であれば、そのストレスから解放されるために、別の場所に移動したり、インターネットの世界に浸ってみたりすることができますが、この船上の社会の中では、逃げることはできません。私は、逃げることを考える弱い自分と向き合うことと、「違い」の対象である外国参加青年と対峙することを強いられました。しかし、悩み苦しんでいる私に笑顔で声を掛けてくれ、常に様子を伺ってくれたのが、まさに相部屋の外国参加青年でした。寝食を共にし、会話を交わすうちに、お互いの価値観や多様性を認め合うことができるようになりました。それ以降、船上の社会生活は、新しい学びにあふれ、大きな刺激となりました。私は、**今まで目を背けていた「違い」に向き合う**ことで、これまでの自分のモノサシなどちっぽけなものだ、ということを経験から学びました。

現在私は、会社員として働いています。社内では、確かに、築き上げてきたものには安心感や利便性がありますが、一方で、それだけでは成長に限界があることをこの事業から学びました。そこで私は、社内の中で私自身が「違い」になることで、会社の成長に良い刺激をもたらしたいと考えています。そのためにも、私は今後も様々な経験と多くの出会いを大切に、変化を楽しみたいと考えています。



大江 章太 (2017年度参加)



H.E. Mr. Thongloun Sisoulithラオス人民民主共和国首相表敬訪問(ラオス)



船内でのグループ対抗レクリエーション(ラオス)



船内でコースを通して変化した自身の防災意識についてスピーチする参加青年たち(「防災活動のための人材育成」コース)

## 「世界青年の船」事業 Ship for World Youth Program (SWY)

1967年度開始の「明治百年事業」にルーツがある事業で、国際化や多様化が進展する社会でリーダーシップを発揮して、社会貢献を行うことができる青年を育成することを目的に実施しています。リーダーシップや異文化理解を、理論・実践の両面で強化することに重点を置いています。

毎年異なる世界10か国から集まる外国青年と、約1週間の陸上研修と約1か月間の船上研修(訪問国活動を含む)に参加し、共同生活をしながら、ディスカッションや交流活動を行います。

### [事業概要]

- 活動内容: コース・ディスカッション、セミナー、各国紹介、委員会活動、参加青年による自主企画活動、スポーツ・レクリエーション、表敬訪問、課題別視察等
- ディスカッションテーマ: ①平和な世界をつくるための教育  
②お互いを高め合う実践型エンパワメント  
③グローバル・シティズンシップ ④グローバル・ヘルス ⑤国際協力  
⑥情報とメディア ⑦ソフトパワーと青年外交 ※2018年度の例
- 参加国: オーストラリア、チリ、エクアドル、ギリシャ、ソロモン諸島、スウェーデン、タンザニア、トルコ、アラブ首長国連邦、バヌアツ、日本 ※2018年度の例
- 参加青年数: 日本青年120名程度、外国青年10か国120名程度
- 寄港地: 沖縄(日本)、ダーウィン、ブリスベン(オーストラリア) ※2018年度の例
- 運航期間: 1月~3月頃(35日間程度)



日本参加青年の自主企画によるブロックチェーンに関するセミナー



女性の活躍を支援する自助グループSHGクドゥムバジュリの女性専用ジムを訪問(訪問国活動、インド)

### ■参加青年の感想



中塚 千和  
(2017年度参加)

船上研修では**学問的な学びと文化的な学び**がありました。初めに学問的な学びの部分では、各セミナーやコース・ディスカッションが挙げられます。私は「ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現」コースに所属し、全ての人がありのままに受け入れられ、多様性が尊重され生きやすい社会をつくるためのディスカッションを行いました。男女格差や性の多様性、障がいや人種などの多岐にわたるトピックを扱いました。各セッション後に時間が足りず、その後夕飯を共にしながら議論を続けたり、語り合っているといつの間にか輪が広がり、仲間と夜遅くまで話し込んだりしたことは忘れられない思い出になりました。国や文化を超えて議論をする時必ず意識しなければならないことは、相手を尊重し、むやみに否定しないことだと思います。ある国では当たり前のことが、ある国では犯罪になる場合もあります。相手と自分の国について学び、そして相手の意見を尊重しつつも、よりよい社会を目指すために自分の意見を持つことの大切さを学びました。

また、文化的な学びの部分では、各国の文化、歴史、社会問題等を発表し合う**ナショナルプレゼンテーションや自主活動での勉強会**、また、**日常生活から各国の文化を学ぶ**ことができました。特に寄港地のインドとスリランカでは、現地の学生とのディスカッションや文化交流を通して、**自分の五感全てで異文化を感じる貴重な経験**をすることができました。更に船上で他の参加者と協力して企画した武道会や百人一首勉強会などを通して、自分から日本文化の発信ができたことは大きな自信になりました。

この企画に日本・外国参加青年問わず多くの方が興味を示し、積極的に参加してくれたことは忘れられない思い出になりました。

船という空間は、仲間から多くを学ぶことができると同時に、一人一人がかけがえのない個性を存分に発揮することで自分自身をより深く理解できる場所だと感じました。船での生活で培った異文化理解力、そして「自分たちが各分野で社会をより良くするんだ。」というモチベーションを忘れず、世界中にいる既参加青年たちとのネットワークを活用しながら、自分が今後携わる分野でもこの経験を発信し、学び続けていきたいです。



マイトリーバーラ・シリセーナ スリランカ大統領を表敬訪問する(訪問国活動、スリランカ)



ラオス国立大学の学生とディスカッションする参加青年たち(ラオス)

## 国際社会青年育成事業

### International Youth Development Exchange Program (INDEX)

内閣府の青年国際交流事業において最も歴史のある事業で、1959年(昭和34年)、1993年(平成5年)の当時の皇太子殿下の御成婚を記念する事業として発展してきました(1959年に「青年海外派遣事業」を開始、1994年に「国際青年育成交流事業」に発展)。

これまでの「国際青年育成交流事業」はバルト三国や中南米及びアジア諸国などに日本青年を派遣し、訪問国では現地青年との文化・教育・環境に関するディスカッション、企業等施設訪問及びホームステイを行ってきました。そして帰国後は、日本に招へいされた外国青年と一堂に会して国際青年交流会議に参加し、外国青年とのディスカッションを通じてプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上に努めてきました。

そして、2019年5月のお代替わりを契機に、「国際青年育成交流事業」は、骨格を残しつつ、より現代のグローバル社会に沿った国際的視野を持つ青年育成を行う事業として、「国際社会青年育成事業」に生まれ変わります。新事業では共通の課題を抱える2か国ずつに青年を派遣します。

【事業概要(派遣プログラム)】※「国際青年育成交流事業」時のものとなりますが、新事業でもプログラム構成の骨格は維持します。

活動内容: 表敬訪問、現地青年とのディスカッション、日本文化紹介、国際協力活動の体験、ホームステイ、課題別視察等

訪問国: オーストリア、ラオス、ラトビア ※2018年度の例

参加青年数: 12名程度×3か国 ※2018年度の例。2019年度からは、12名程度×3地域(2か国ずつ)とする予定

派遣期間: 9月～10月頃(18日間)

※派遣プログラム後の国際青年交流会議にて、招へい国青年と交流・討論

#### 【参考】招へいプログラム

招へい国: オーストリア、チリ、ドミニカ共和国、ラオス、ラトビア、ベトナム ※2018年度の例

招へい期間: 10月頃(16日間)

招へい青年数: 6か国計50名程度



ライモンツ・ヴェーヨニス ラトビア大統領を表敬訪問(ラトビア)



ヤングカリタス(キリスト教系青少年支援団体)のメンバーとディスカッション(オーストリア)

#### ■参加青年の感想 ※「国際青年育成交流事業」時のものとなります。



宮澤 俊太郎  
(2017年度参加 ミャンマー派遣)

ミャンマーのヤンゴン川を渡る大きな船の上では、まだ7歳ほどの少年が強烈な匂いを放つ小魚を袋いっぱい詰めて、船を回って販売していた。靴を履いても歩くのがはばかれるほど船上の床は汚かったが、彼の足元を見れば裸足だった。その日は日曜日だったので、ホームビジット先の娘さんを介して週末だけ働いているのかと聞いてみたが、彼は毎日働いていると答えた。学校に行けず、家庭のために毎日船に乗り込み、働いている。私は胸が張り裂けるほど複雑な気持ちになったが、対照的に彼の目は、ここから這い上がってみせるというミャンマー人のハングリーさを如実に表した真っ直ぐな目をしていて。

彼と同じ年代ほどの子供たちに、今度は学校で出会う機会があった。僧院学校と呼ばれる、日本でいう公立小学校を訪問した。1クラス40名の声とは思えないほどの大きな声が教室に響き渡り、先生の問いかけに全員で答えていた。もちろん冷房などないので、我々は汗だくになりながら、小学2年生くらいの生徒たちに折り紙を教え、交流した。タナカ(ミャンマーの伝統的な日焼け止め効果のある顔面装飾品)を塗った顔をクシャッとさせて笑顔を活かす、うまく折れたことをアピールしてくる子供たちは、言葉こそ通じないが我々の心を豊かにするパワーがあった。

この二つのような出合いを日本で経験することは難しいだろう。また、新しいものに触れたときに自分がどう感じるかは、その時にどんな人と一緒にいるかで変わってくると思う。だからなおさら、私はこのプログラムに参加できて良かったと、心から思う。自分にとって最も大切な出合いは、一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出合いだ。団員皆を母親のように見守ってくださり、誰よりも元気な団長。「能ある鷹は爪を隠す」とはまさにこの人のことだと思えるほど、本性を見せない優秀な副団長。そして、北は北海道から南は鹿児島まで、愛すべき兄弟姉妹とも言える団員たち。このプログラムに参加すれば、考え得る最上の出合いと、彼らと共に経験する有意義な時間を過ごすことができるだろう。人との出合いは、染み付いた考え方を取っ払い、自らの行動を変える力がある。そして自分もこの経験をいかし、また次なる出合いへとつなげていきたい。

この二つのような出合いを日本で経験することは難しいだろう。また、新しいものに触れたときに自分がどう感じるかは、その時にどんな人と一緒にいるかで変わってくると思う。だからなおさら、私はこのプログラムに参加できて良かったと、心から思う。自分にとって最も大切な出合いは、一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出合いだ。団員皆を母親のように見守ってくださり、誰よりも元気な団長。「能ある鷹は爪を隠す」とはまさにこの人のことだと思えるほど、本性を見せない優秀な副団長。そして、北は北海道から南は鹿児島まで、愛すべき兄弟姉妹とも言える団員たち。このプログラムに参加すれば、考え得る最上の出合いと、彼らと共に経験する有意義な時間を過ごすことができるだろう。人との出合いは、染み付いた考え方を取っ払い、自らの行動を変える力がある。そして自分もこの経験をいかし、また次なる出合いへとつなげていきたい。



ウィーンの全日制小学校にて折り紙など日本文化を紹介(オーストリア)



スイツ・シエヴァスとの懇談にて民族衣装を試着(ラトビア)



汪鴻雁中華全国青年連合会副主席から全青連、中国共産党大会について説明を受ける参加青年たち

# 日本・中国青年親善交流事業

## Japan China Youth Exchange Program

「日本・中国青年親善交流事業」は、1978年の日中平和友好条約の締結を記念し、1979年から開始された事業で、日本・中国両政府が共同で実施しています。

日本と中国の青年が相互に相手国を訪問し、文化紹介やホームステイを通じた交流とともに、ビジネス環境・就職・ボランティアの状況などについて、両国の共通点や相違点などを掘り下げて考える機会ともなる大学生との意見交換、グローバルに飛躍をとげる中国の先進企業を訪問、起業をめぐるビジネス制度等に関連する施設の訪問等を行います。

### 【事業概要（派遣プログラム）】

活動内容： 表敬訪問、現地青年等とのディスカッション、各種施設訪問、文化紹介、ホームステイ等

訪問先： 北京、西安、宝鶏、成都 ※2018年度の例

参加青年数： 25名程度\*

派遣期間： 10月～11月頃（12日間）

\*団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度

※招へいプログラムや派遣プログラムにおける夕食交流会で中国招へい青年と交流・ディスカッション

### 【参考】招へいプログラム

招へい期間： 8月～9月（12日間）

招へい青年数： 30名程度（団長・副団長を含む）



北京大学学生との活発な意見交換



惠水県好花紅村にて布依(ブイ)族による歓迎

### ■参加青年の感想



飯塚 真央（2017年度参加）

私たち中国派遣団は北京市、貴州省、広東省の3か所を訪れた。その一つである貴州省には**17の少数民族**が住んでおり、惠水県と雷山県にて実際にブイ族、ミャオ族の文化を知ることができた。また視察を通して、貴州の経済発展も目にした。そして私自身最も印象に残っているのは、貴州省貴陽市で行われたホームステイであった。

私は5歳の子を持つ夫妻の3人家族のもとで、**一泊二日のホームステイ**を行った。私が来ることを聞いたホストファザーの友人らも駆けつけてくれた。私自身、一人でホームステイをしたため、言葉の壁が不安であった。しかし、私が伝えようとしていることを彼らが懸命に理解しようとしてくれたおかげで、そのような不安はすぐになくなった。夕食になると、ホストファミリーは私に貴州料理を作ってくれて、そのおもてなしには大変驚いた。中国では、食後に散歩に出かける人が多いそうだ。その

のため、私もホストファミリーとその友人らと共に中心街まで散歩をした。そこは多くの高層マンションが立ち並び、運動をする人や踊っている人が集まっていて、とても賑わっていた。町を散策することで、中国人の生活を目にすることができ、日本人との違いを知る大変良い機会となった。

二日目には、貴州大学に連れて行ってもらった。キャンパス内は車で移動するほど広く、学生数も私の大学の3倍以上であったため、その規模には驚かされた。**ホストファザーは貴州省でボランティア活動**をしている方であり、大学内にある活動拠点を訪問した。**彼のボランティアに対する熱い思い、貴州を愛する心は忘れられない**ものであった。彼は貴州省に長く住んでいるため、貴州について非常に詳しく、文化など様々な話題を私に教えてくれた。私自身も、日本の文化について紹介することで、互いに理解を深め合うことができた。「日本に行ってみよう」と言われた時は本当に嬉しかった。

二日間のホームステイはあっという間に終わってしまったが、ホストファミリーは私に「さようなら」という言葉ではなく、「また会おう」と言ってくれた。国境を越えてのこの出会いは、私にとって宝となった。住んでいる国が違っていても、今後も友情を築いていきたい。



ホストファミリーと名所・黄金大道で紅葉で綺麗な景色を鑑賞



騰訊(テンセント)株式会社を視察



Nソウルタワーにて記念撮影する参加青年たち

## 日本・韓国青年親善交流事業 Japan Korea Youth Exchange Program

「日本・韓国青年親善交流事業」は、1984年の日韓両国首脳会議における共同声明の趣旨及び1985年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、両国政府の共同事業として1987年から友好の象徴として実施している事業です。

文化紹介やホームステイを通じた交流、地球環境、産業、文化、教育、社会福祉等の各種施設、先進企業の訪問や韓国青年とのディスカッション等を行います。これらを通じて、日韓関係の将来に向けたありようについて踏み込んで考え、どのような領域で青年たちが貢献できるのかを考えてゆく機会ともなります。また、日本に招へいた韓国青年と日本青年との「日韓青年親善交流のつどい」（合宿型ディスカッション・文化交流プログラム）等を行っています。

### 【事業概要（派遣プログラム）】

活動内容： 表敬訪問、現地青年との合宿型ディスカッション・文化交流プログラム（「日韓青少年交流会」）、各種施設訪問、文化紹介、ホームステイ等

訪問地： ソウル、江陵、平昌、原州、漣川、平澤、水原 ※2018年度の例

参加青年数： 25名程度\*

派遣期間： 9月～10月頃（15日間）

\*団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度

\*日本での「日韓青年親善交流のつどい」や韓国での「日韓青少年交流会」にて、韓国招へい青年等と交流・討論

### 【参考】招へいプログラム

招へい期間： 7月～8月頃（15日間）

招へい青年数： 30名程度（団長・副団長を含む）



ソウルにて韓服体験



韓半島統一未来センターを訪問

### ■参加青年の感想



木村 朝香（2017年度参加）  
（写真中央）

「하나 (ハナ) になろう!～咲かせ☆日韓の笑顔～」。「日本青年も韓国青年もハナ（日本語で『一つ』）になって、大輪の笑顔の花を咲かせたい。」こんな思いで掲げた私たち韓国派遣団のスローガンをまさに実感したのが、韓国青年との交流会である。

私たち派遣団は、2泊3日で約25名の韓国青年と交流会を行った。派遣期間中初めての同世代の韓国青年との本格的な交流に、膨らむ期待と同時に少し緊張した気持ちを抱いた私たちを、韓国青年は温かな拍手と大きな笑顔で迎えてくれた。

交流会初日のレクリエーションでは、日韓混合の小チームに分かれ、いくつかのミニゲームを行った。会ったばかりではあったが皆すぐに打ち解けていった。そこに、日本・韓国といった国の区別は存在せず、チームの枠も超えた応援の声援が飛び交い、皆の笑顔が弾けた。

二日目には、多文化共生を大テーマにディスカッションを行った。いずれの班も活発に意見を交換し合い、両国における様々な問題を巡る状況や、考え方の相違点を学んだ。より相手のことを理解すると同時に、自分たちについても改めて知ることができた、密度の濃い時間となった。ディスカッション後は、各班で話し合った内容を短時間の映像にまとめた。皆で創意工夫を凝らし、一つになって映像を完成させた時には、両国の青年とも大きな達成感と喜びを味わった。その他にも、夜の文化交流会や最終日の共同活動など、韓国青年と共に楽しみ、語り合い、貴重な時間を過ごし、交流会では終始笑顔が絶えなかった。

2泊3日という短い時間の中ではあったが、韓国青年の優しさやフレンドリーさ、両国青年の仲良くなりたいたいという気持ちから、交流会を通し、団員一人一人が韓国青年との友情を築いていくことができた。閉会式の際には皆が別れを惜しみ、抱擁し合った。バスに乗ってからも、お互いが見えなくなるまで手を振り続けた。中には、後に私たちの宿泊するホテルのロビーまで遠くから足を運んでくれる韓国青年もあり、この交流会で築いた日韓両国青年の絆の強さを実感した。

私自身も、韓国青年と、他愛もない楽しい話からお互いの悩みの話までできる、とても深い関係を築くことができた。派遣が終了した今でも、連絡を取り合っている。本事業に参加したことで、共に韓国に渡った日本青年の仲間、そして多くの韓国青年と出会い、強い絆を結べたことに、喜びと感謝でいっぱいである。

今回の派遣を通し하나 (ハナ) になった私たちは、これからもお互いをずっと大切に続け、生涯にわたる、更に強い友情を築いていきたい。



日韓青少年交流会の討論会



国立平昌青少年修練院にて体験活動



連邦政府が実施する多世代ハウスプログラムを視察する参加青年たち(ドイツ、高齢者分野)

# 地域課題対応人材育成事業 「地域コアリーダープログラム」 Community Core Leaders Development Program

多様な個人が能力を発揮しつつ、自立して共に社会に参加し支え合う「共生社会」を地域において築いていくためには、住民や非営利団体、行政機関等による取組の充実が必要です。

各地域で高齢者、障害者、青少年関連の課題解決に向けた取組に携わる日本青年を、3分野において特色のある事例を有する3か国に派遣する、専門職・組織マネジメント経験者向けの事業です。各国で同じ分野で働く同世代の若者との交流や政府機関・関連団体及び施設の訪問や意見交換等を通じて、国内外に広がる人的ネットワークを形成し、社会課題解決能力を高めます。

訪問国では、同様の課題解決に取り組む専門家との交流を促し、組織の運営、関係機関との連携、人的ネットワーク形成に必要な実務的能力の向上を目指します。また帰国後は、日本に招へいされた外国青年と一堂に会してNPOマネジメントフォーラムに参加し、外国青年とのディスカッションを通じて、日本の地域社会における課題解決に向けて中心的な担い手となる青年リーダー（コアリーダー）の育成を目指します。

## 【事業概要（派遣プログラム）】

活動内容： 3回にわたる国内研修、訪問国における各専門分野の社会活動の現場視察、関連施設の訪問、表敬訪問、意見交換、ホームステイ等

テーマ： 高齢者分野「地域における高齢者支援に必要な連携」  
障害者分野「地域における障害者の社会参画の更なる拡大」  
青少年分野「子供・若者の育成支援に関わる人材の養成」 ※2018年度の例

訪問国： ドイツ（高齢者分野）、フィンランド（障害者分野）、ニュージーランド（青少年分野） ※2018年度の例

参加青年数： 8名程度×3か国

派遣期間： 11月頃（10日間）

※派遣プログラム後に東京で開催する「NPOマネジメントフォーラム」にて、招へい青年と交流・討論

## 【参考】招へいプログラム

招へい期間： 11月～12月頃（15日間）

招へい青年数： 8名程度×3か国



在フィンランド日本国大使館山本条太特命全権大使を表敬訪問（フィンランド、障害者分野）



青少年育成で地元との連携に特色のあるハットバリー高校を訪問（ニュージーランド、青少年分野）

## ■参加者の感想

「ユースワーカー」という言葉をニュージーランド現地で初めて知りました。言葉のとおり若者に関わる仕事に従事する人材のことを指しますが、日本ではあまり馴染みのない呼称かと思います。若者の自立を支援する専門職と定義する機関もあり、我が国でも社会的ニーズがあるように感じています。ニュージーランドでも2011年頃から「ユースワーカー」という職業の認知が拡がり始め、現在では**非営利団体や学校組織にユースワーカーというポストが存在**しています。実際に訪問したウェルテック大学では、「ユースワーカー」になるための学科があり、学生は青少年育成プログラムを学んでいます。

私自身、教師として学級運営を担ったときや取締役として会社経営に携わった際に意識していたことは、実はこの「ユースワーカー」的マインドそのものだったのだと派遣プログラムを通じて気付くことができました。親だけでも教師だけでなく、地域全体の大人が若者を支援することが大切です。しかしながら、日本では社会全般において若者育成のための**当事者意識（オーナーシップ）**が欠如しており、責任の所在を明確にするためなのか「これは学校がやることで、これは保護者がやること」というように縦割り物事を捉える傾向があるように思えます。

ニュージーランドでの驚きの一つは青少年に関わる人々が口を揃えて「私はユースワーカーだ!」と言っていることです。政府機関のスタッフ、スポーツ団体のコーチ、学校の先生、医師、看護師などそれぞれの専門家が「**ユースワーカーである**」という**オーナーシップを持ち、各団体・機関と連携していることに感動**を覚えました。戦後、日本では青少年育成は「教えること（teach）」が最優先であったのかもしれませんが、これからは青少年を「支えること（support）」が重要なかもしれません。**地域の大人が「サポーター（supporter）」たる伴走者となることが重要**だと実感しています。

私は帰国後、自己紹介する際に「私はユースワーカーです」とあえて言うようにしています。今回の派遣プログラムに参加した仲間たちは同じ「ユースワーカー」という意識でこれからも情報交換・交流を続けていけるものと信じております。それは、志同じくかけがえのない時間を共に過ごせたからです。私たちは、「2021年日本ユースワーカー元年」を合言葉に既に動き始めました。将来の「スーパー」コアリーダーである仲間たちと青少年育成のムーブメントを起こしてゆく決意です。



高島 靖明  
（2018年度参加  
ニュージーランド、青少年分野）



ドルトムント市高齢福祉課にて、日本の高齢者施策について発表(ドイツ、高齢者分野)



障害者を対象としたサービス付き住居にて利用者の方々と交流（フィンランド、障害者分野）

# プログラム参加後も広がる活動の輪!～事後活動～

## IYEOとは?

1959年から始まった内閣府の青年国際交流事業に参加した青年たちが、国際理解を深め、事業で得た学びを広く社会に還元することを目的として、自主的に発足させた同窓会組織が「日本青年国際交流機構」(IYEO: International Youth Exchange Organization of Japan)です。IYEOは47の全ての都道府県で自主的な団体を組織して、幅広い活動を展開しています。



IYEOマスコットキャラクター「ランナス」  
走る(RUN) +地球(EARTH)

### コンセプト

IYEOには日本全国のみならず国境を越えてたくさんネットワークがあり、青少年の育成を基盤としながら様々な社会貢献活動に取り組んでいます。ランナスは、地球自体が走り回るかのようにいきいきと活動するIYEO会員を表しています。船の帽子と飛行機の鞆を身につけて、今日も笑顔で走り続けます。



## 47都道府県 8ブロックで活動中!

<各都道府県IYEOの主な活動>

- ・ブロック大会(青少年国際交流を考える集い)
- ・内閣府青年国際交流事業で招へいされた外国青年の地方プログラム
- ・都道府県独自の国際交流・地域貢献プログラム

## IYEOではどんな活動ができる?

IYEOは、「社会でリーダーシップを発揮できる人材育成を目指して」を活動方針に掲げ、①青年層の活性化の基盤づくり、②地域社会を活性化するとともに地域に貢献できる人材育成、③国際ネットワークをいかした国際協力活動を柱に様々な活動を展開しています。

① 青年層の活性化の基盤づくり

② 地域活性化・地域に貢献できる人材育成

③ 国際ネットワークをいかした国際協力活動

## ① 青年層の活性化の基盤づくり

### 国際会議やフォーラムに参加する日本代表青年を推薦

IYEOでは、内閣府と協力しつつ、各国政府、国際機関などの要請に基づき、会員である内閣府の青年国際交流事業に参加経験のある青年から、日本代表青年として会議やフォーラムに派遣しています。

<日本代表青年としてIYEO会員を派遣した例(2018年)>

- ・ ASEAN+3 Youth Social Business Summit (マレーシア)
- ・ International Youth Festival to Achieve the SDGs (バーレーン)
- ・ ASEAN+3 Young Entrepreneurs Forum (ベトナム)
- ・ 北方四島交流訪問事業

### 派遣者の感想

バーレーンで開催されたInternational Youth Festival to Achieve the SDGsに参加しました。本イベントは世界各国から青年が集まり、国連が制定するSDGsに向けてどう仕事をしていくか、どう生きていくかを共有し、個々の考えを深めることを目的としていました。今回の派遣を通して学んだこと、感じたことは多くあります。その中でも意識と共有の大切さについて述べたいと思います。

世界で活躍している方のお話を聞く機会がプログラム午前中に組み立てられており、自分の分野でない内容について多くのインプットがありました。アウトプットは参加青年とプログラム外で討論したこと、ベストスピーカー賞をいただいたペチャクチャコンテストでプレゼンをしたことです。プレゼン内容の「ゴール9(産業と技術革新の基盤をつくろう)」は自分の分野でなかったため、調べ学習がとてつもないになりました。どのお話でも、どの討論でも、「常に高い意識を持ち、小さなことから、自分ができることから始めていくことが大切」という結論に至りました。今すぐにはできることの一つとして大学で体験談をプレゼンする機会が与えられました。大学生と私の体験を共有し、SDGsについて考える機会となればうれしいです。

第30回「世界青年の船」事業参加青年 大須賀 史子



### IYEO自主活動サポート助成金制度(チャレンジファンド)などを用いた、会員のボランティア活動の啓発・促進



チャレンジファンドを活用した例: 障害福祉青年フォーラム in TOKYO (2018年)

「チャレンジファンド」は、IYEOの人的活力をより社会に提供すること、また団体として活性化を図ることを目的として2011年に創設したもので、IYEO会員が自主的な国際交流活動を実施する際に、その活動資金の一部を助成しています。詳細についてはこちらを御覧ください。⇒URL:<https://www.iyeo.or.jp/ja/profile/challengefund.html>

## ② 地域活性化・地域に貢献できる人材育成

IYEO会員は、各地域、職域、学校又は青少年団体等で様々な活動を行っています。各都道府県IYEOの独自活動もありますが、青年国際交流事業に参加するために招へいされた外国青年の地方プログラムを各都道府県IYEOの実行委員会が中心となって企画しています。

### 全国大会・ブロック大会（青少年国際交流を考える集い）

定期的な集まりとして、各地域での事後活動の進捗状況を報告し、活動を更に充実させるための方策について意見交換を行い、国際交流活動を一般の方にも紹介することを目的として年に1回、「全国大会」を、また、全国8ブロックに分かれてブロック大会（青少年国際交流を考える集い）を開催し、近隣都道府県の連携も図っています。

#### 平成30年度（2018年度）ブロック大会（青少年国際交流を考える集い）一覧

ブロック	開催府県	日程	場所	テーマ
北海道・東北	山形県	9/1～2	山形グランドホテル	「地域活動団体の連携によるグローバル人材育成の取組」
関東	千葉県 全国大会	12/1～2	ウイシュトンホテル ユーカーリ	『時代を切り拓く開拓者精神』 ～未来につながる新たな挑戦者を目指して～
北信越	長野県	2019年 3/9～10	ビューホテル嶋田屋	「人とのご縁で世界にジャンプ!」
東海	岐阜県	11/10～11	岐阜文化センター	「地域文化×地域活性化～次世代につなぐ地域の魅力～」
近畿	大阪府	11/3～4	ホテルクレスタいばらき	『大阪の過去・現在・未来～万博を通してサステナブル・シティを考える～』
中国	鳥取県	10/13～14	国際ファミリープラザ	「自分のなかに、地域のなかに、世界のなかに、次の時代の星を輝かせて」 ～地域で考える 魅力、優しさ、個性～
四国	香川県	7/21～22	ルポール讃岐	『小さな島で大きく生きる』～世界から人を呼び込む力を磨こう～
九州	長崎県	2019年 1/26～27	ホテルセントヒル長崎	「ながさき事始」～長崎に息づく異文化を再認識し、多文化共生について考える～

#### 実行委員会の声（2018年度四国ブロック大会）

基調講演に登場する瀬戸内海沖の「男木島」は、四国、ひいては日本も世界から見ると「小さな島」に過ぎません。通信技術の発達により、世界に情報を発信したり、逆に情報を取り入れたりすることが容易になった現在、「小さな島」に暮らす私たちでも、考え方や行動一つで、大きな世界に開かれた生き方が可能です。本大会では、人々を巻き込む力と世界への発信力が様々な能力を持った人材間の協力を促し、地域の活性化につながる様子を学びました。



#### 参加者の声

- ・ 基調講演に関して、実践に基づいた話は、リアルで再現性が高かったです。
- ・ 四国外からの参加でしたが、温かく受け入れてくれました。知らない人ばかりの中、心が温かくなりました。交通アクセス、美味しい食事、うどんのウェルカムサービス、お菓子やお水を配ってくれる配慮、香川の良い雰囲気を感じることができました。
- ・ 四国のIYEOの皆さんの雰囲気が非常に良く、大会を楽しめました。

## ③ 国際ネットワークをいかした国際協力活動

内閣府の青年国際交流事業に参加した青年は日本人のみではありません。約60年の長い歴史の中、既参加青年たちは世界的な人的ネットワークを形成・発展しています。



### 1. SSEAYPインターナショナル SI (SSEAYP International)

「東南アジア青年の船」事業 (SSEAYP) の参加11か国では、IYEOと同様に活動団体を組織し、各国において各種の国際交流活動及び青少年健全育成活動等に寄与しています。SIはSSEAYPに参加することで得られた友情の永続・発展を図るとともに、国際交流活動及び社会貢献活動などにより、各国事後活動組織の活動を展開することを第一の目的としています。年に1回、各国持ち廻りでSIGA (SI総会) が開催されています。



### 2. 「世界青年の船」事後活動組織SWYAA (Ship for World Youth Alumni Association)

「世界青年の船」事業の既参加青年による事後活動組織で、事業で培われた精神の継承を目的に、SWYAA連盟を設立しています。正式加盟国29か国、準加盟国6か国が登録 (2018年5月時点) し、非加盟の関係国と合わせて65か国が連携しながら、各国で社会活動を展開しています。年に1回、活動が活発な国でSWYAGA (SWYAA国際大会) が開催されています。



### 3. 日韓交流連絡会議

日本・韓国青年親善交流事業に参加した日本・韓国両国の既参加青年は、派遣年度や国を越えた既参加青年ネットワークをいかし、日韓交流の更なる発展を目指して、毎年1回、パネルディスカッションやレクリエーションを交えた、日韓交流連絡会議を開催しています。



日本青年国際交流機構 (IYEO)

詳しくはこちら URL: <http://www.iyeo.or.jp/ja/>

日本青年国際交流機構 検索



IYEOのご案内

## ◆事業参加の流れ

### こんな人にお勧め!

- ・国内外の青年とネットワークを形成したい人
- ・国際交流を通じた社会貢献を志す人
- ・実践的なコミュニケーション能力、リーダーシップ、異文化対応力を高めたい人

### 応募

1月下旬～3月

各都道府県の青年国際交流主管課又は全国的な組織を持つ青少年団体へ参加申込書と作文を提出

※年齢条件：18歳～30歳であること

(募集年度の4月1日時点。ただし、「地域コアリーダープログラム」は23歳～40歳)

### 選考

3月～6月

#### 第1次選考(3月～4月)

各都道府県、青少年団体が定める選考試験を受験

#### 第2次選考(5月～6月)

内閣府が、第1次選考の結果に基づいて第2次選考試験の受験者を決定し、実施

### 事前研修

6月～9月

第2次選考試験合格者は、事前研修に参加し、事業の趣旨、内容、訪問国等についての理解を深め、必要な諸準備を行う。

### 事業参加

出発前研修 → 事業参加 → 帰国後研修・報告会

### 事後活動

内閣府青年国際交流事業の参加者を中心とした日本青年国際交流機構(IYEO)が東京都内に本部を置き、47都道府県で団体を組織して、ボランティアによる自主的な活動をしています。その仲間に加わることによって、興味・やる気次第で社会活動に参加するチャンスが広がります。

### 内閣府青年国際交流事業

詳しくはこちら URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

内閣府青年国際交流

検索



### 青年国際交流2019 「世界を見に行ったら、自分を見つけた」

発行日：2019年1月11日

発行：内閣府青年国際交流担当室

〒100-8914 千代田区永田町1-6-1 中央合同庁舎8号館8階

TEL：03-6257-1434 FAX：03-3581-1609 URL：<https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集：一般財団法人青少年国際交流推進センター

(Center for International Youth Exchange) URL: <http://www.centerye.org/>

編集協力：日本青年国際交流機構

International Youth Exchange Organization of Japan (IYEO) URL: <http://www.iyeo.or.jp/ja/>